

委員御提出資料

文化関係資料のアーカイブに関する有識者会議 会議資料

1. 国立西洋美術館での取組み・事例

1.1 情報資料室の活動

- ・図書:美術館活動を支える図書、雑誌の収集、整理。研究資料センター(図書室)の運用。
- ・データ:収蔵品データの収集、整理。収蔵品データベース(和英2カ国語)の公開。
- ・資料(アーカイブズ):収蔵品関係資料の収集、整理。作品ファイルの整備(公開準備段階)。館史資料(ミュージアム・アーカイブズ)、美術関係資料の収集、整理(検討段階)。

1.2 盗難美術品をめぐる情報提供

- ・美術品盗難事件捜査に協力した。作品の来歴を調べたが、欧州にあった期間については追跡可能なのに対し、国内にあった期間については調査手段が殆どない。美術品が日本にあると来歴に空白が生まれてしまうのか？
- ・欧米で資料によって美術品の来歴を検証できるのは、資料集積拠点(アーカイブ)や膨大な資料の蓄積、それに基づいて作成されたデータベースがあるからである。わが国にもこのような堅牢な基盤が必要。

1.3 過去の日本のコレクションをめぐる情報提供

- ・独ナチスに協力した画商の相続人が略奪美術品等を大量に隠し持っていた問題で、海外より情報照会があり、外交文書記録等に基づいて対応した。1930年代に日本人実業家・松方幸次郎の所持品であった作品が1点(?)含まれていることが判明したため、当館に照会があった。
- ・日本のコレクション情報に対するニーズは、現在のみならず過去に関する情報にも及んでいる。現在の所在はもちろんのこと、過去にも遡って情報を網羅する必要がある。国際社会において来歴調査の重要性はますます高まっており(ワシントン原則等)、その要請に応えるため、図書のみならず記録資料、歴史文書も含めて総合的に情報を集積する美術情報拠点(ライブラリー&アーカイブズ、リサーチ・センター)を再構築することが必要。

1.4 図書館の国際共同事業への参加

- ・図書館の国際共同事業「アート・ディスカバリー・グループ目録」に参加した。世界の主要美術図書館(欧米、アジア、オーストラリア等の36図書館とコンソーシアム3団体24館)と共同で新しい美術情報サービスを開始。
- ・各国には、国立館(国立美術図書館や国立美術館等)をはじめとする美術史研究拠点において、紙媒体資料から電子データまでの蓄積を高い水準で実施してきた実績がある。今回の最先端デジタル連携事業を可能にしているのは、伝統的に培われてきた情報集積基盤(億単位のレコード件数)である。

2. 全国美術館会議 情報・資料研究部会での取組み・事例

2.1 美術館収蔵品目録総覧の公開準備

- ・文化遺産データベースが伸び悩む状況を受け、冊子体目録の情報を集約し『全国美術館会議会員館 収蔵品目録総覧』を編纂した(356館1,020タイトル)。試験版を限定公開中、7月に本公開予定。
- ・編集過程で明らかになったのは、多くの美術館の現状として、収蔵品データの整備・公開、多言語化による海外への情報発信といった事業に取り組む余裕・体力がないこと。国際社会の一員としてわが国所在の文化財データを網羅的に整備・発信するには、個々の収蔵館に対しても専門的人材と予算の配備が必要。

3. 課題(案)

- ・美術関係資料の集積拠点(ライブラリー&アーカイブズ)の形成。
- ・各博物館・美術館に対する収蔵品データベース整備(多言語化を含む)・公開に向けた支援。

* 知のデジタルアーカイブに関する研究会（総務省、知デジ研（注））

- ・ 知のデジタルアーカイブ～社会の知識インフラの拡充に向けて～
- ・ 2011 年 2 月～2012 年 3 月（議論を開始してすぐに東日本大震災）
- ・ 知デジ研の提言（2012 年 3 月）
 - 大福帳からデジタルへ。知的資産の公開の促進
 - 人的基盤の構築（⇒デジタルアーカイブネットワーク DAN の推進）
 - システム基盤の構築
 - コンテンツ流通基盤の構築

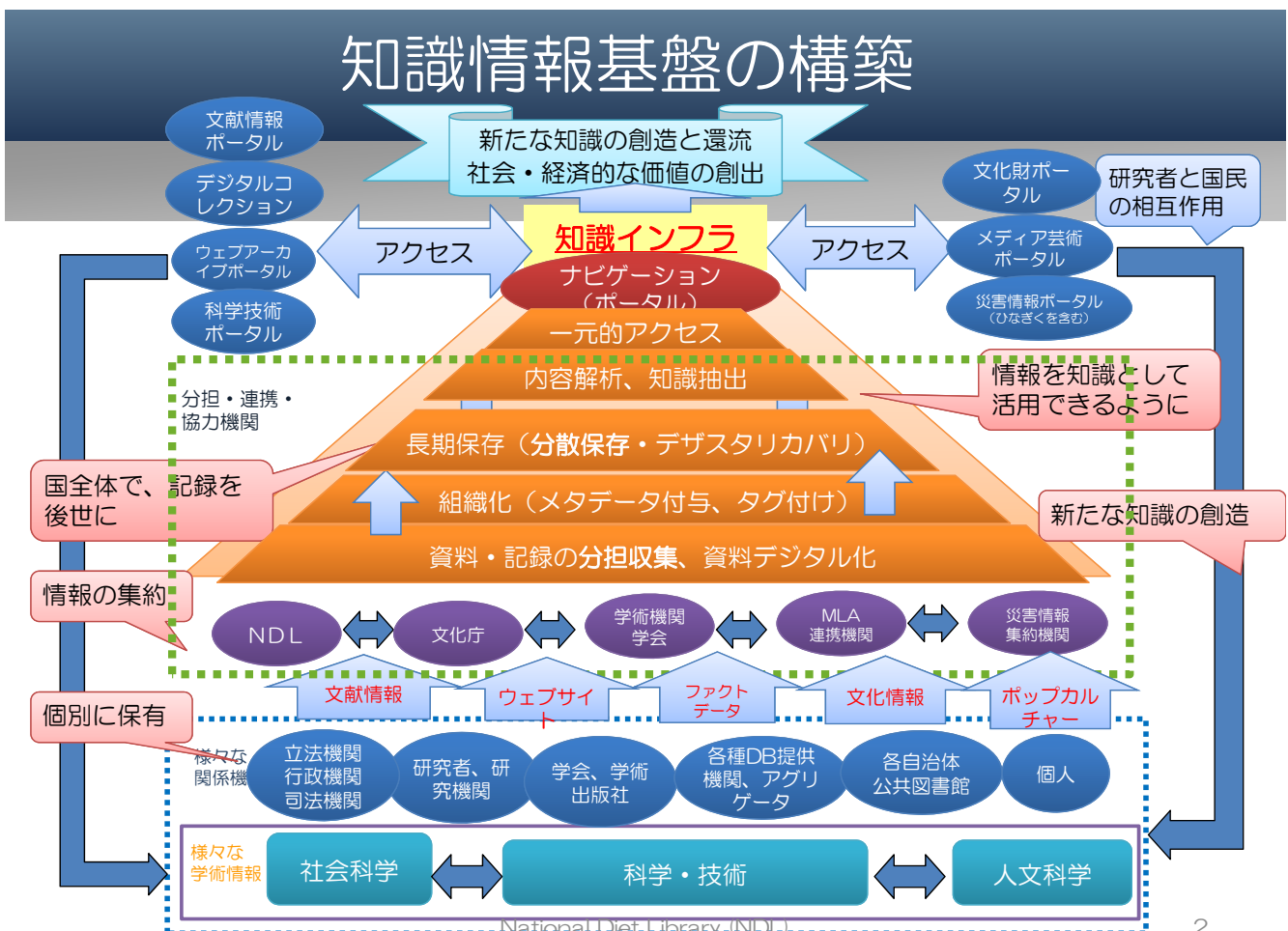
注： 知のデジタルアーカイブ～社会の知識インフラの拡充に向けて～（知デジ研・提言とガイドライン），
2012.3 http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01ryutsu02_02000041.html

* DAN ワークショップ（総務省、筑波大学知的コミュニティ基盤研究センターほか）

- ・ 知デジ研提言に基づくデジタルアーカイブ開発推進のための経験や意見の共有の場
- ・ 2012 年 7 月から 2014 年 2 月まで 4 回（札幌、福岡、郡山（福島）、那覇）
- ・ 東日本大震災アーカイブが 4 回を通じての話題
 - 災害を乗り越えて文化資産を継承する
 - 災害情報のアーカイブ化による備え
- ・ 人的資源の不足
 - 収集整理、デジタル化
 - インターネットを使った提供と共有（オープンデータ化）への対応への問題
 - メタデータ情報共有の重要性
- ・ 単独の MLA によるアーカイブ開発とその利用促進の困難さ
 - 人的資源、運営資金の問題
 - コンテンツの少ないアーカイブは使われない
- ・ 電子書籍、デジタル放送、SNS 等、我々を取り巻く情報環境の変化による影響
 - 総デジタルコンテンツ化→デジタル環境でコンテンツをつなぐことの重要性
 - 50 年後に残るのは現在の最新技術ではなくコンテンツ→長期視点
- ・ 文化財、郷土資料の利用性向上に関するいろいろな障壁
 - 郷土学習や地域振興に有効であるといわれても、現実的な有効性が見えにくい
 - 資料のデジタル化、所蔵資料情報のデジタル化が課題→小規模組織の課題
 - ネット上への展開のための知見の少なさが課題→地域の中核組織での課題
 - 自館サイト、自館コンテンツの利用に意識が集中→複数組織の連携基盤の必要性
 - ネットの世界とリアルな世界を結び付けてとらえる意識の薄さ
 - コンテンツの長期利用による付加価値の可能性に対する意識の希薄さ

文化関係資料のアーカイブ の整備と利活用に関して

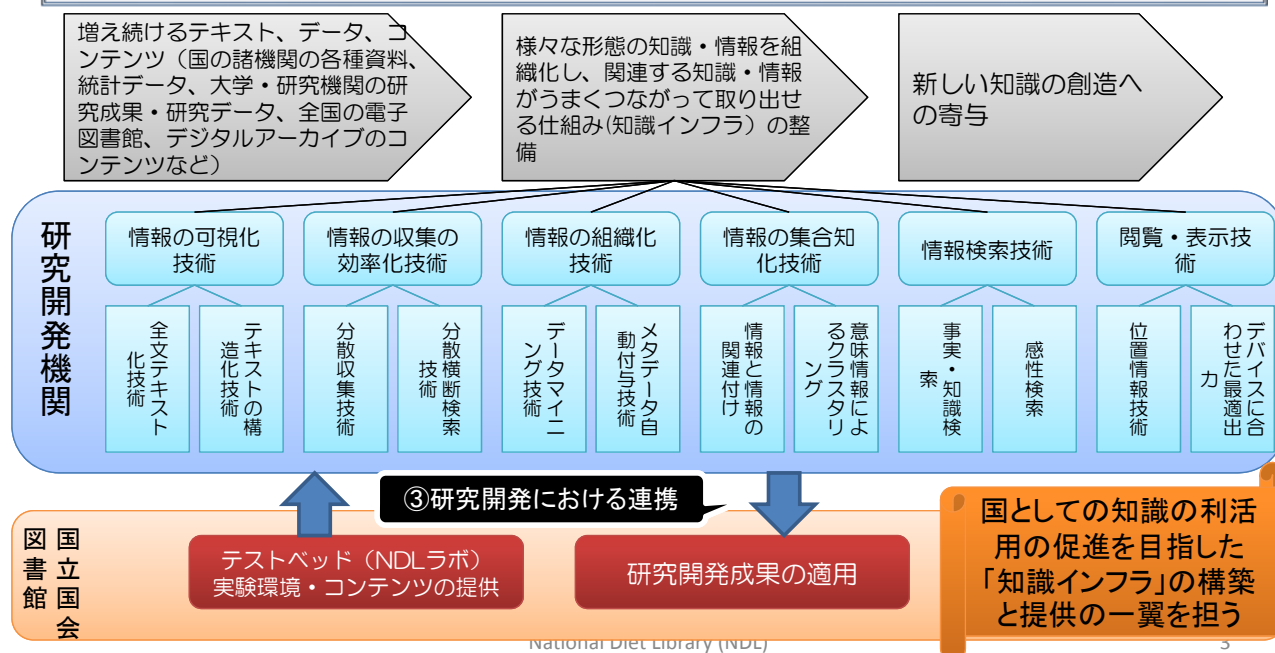
国立国会図書館
総務部 中山正樹



次世代技術の研究開発成果の活用

次世代サービスが目指す方向性

これまでの単なる「情報検索」から、事実としての「知識検索」へ進化させ、知識の再利用による新たな知識の創造に寄与することを目指す。



デジタル化の状況

（2014年2月現在）※点数は概数

資料種別	提供範囲			合計
	インターネット公開	図書館送信	国立国会図書館内限定	
古典籍	7万点	2万点	—	9万点
図書	35万点	50万点	5万点	90万点
雑誌	0.5万点	67万点	40万点	107.5万点
博士論文	1.5万点	12万点	1万点	14万点
その他	4万点	—	5万点	9万点
合計	48万点	131万点	51万点	230万点

国立国会図書館デジタルコレクション

<http://dl.ndl.go.jp/>



- ▶ 2011年公開(2014年1月から現名称)
- ▶ デジタル化資料、電子書籍・電子雑誌、音声・動画を館内・館外に提供(近デジ提供分を含む)
- ▶ 2014年1月からは図書館送信にも対応

National Diet Library (NDL)

5

国立国会図書館サーチ



<http://iss.ndl.go.jp>

- ◆ 2005年にプロトタイプ公開、2007年にPORTAとして公開
 - ◆ まず、青空文庫と近代デジタルライブラリーの統合検索
 - ◆ 2006年に国立公文書館、2009年に国立美術館(国立美術館4館の所蔵作品)
 - ◆ その後、JST、NII、人間文化研究機構等のDBを統合検索
- ◆ 2012年に国立国会図書館サーチ(NDLSearch)として公開
 - ◆ 内外の情報資源を統合検索、一次情報の入手手段までナビゲート
 - ◆ 図書館、博物館、文書館、民間企業など、200DB、約1億件の書誌・メタデータを横断的に検索
 - ◆ 韓国国立中央図書館との連携
- ◆ Web-APIの提供
 - ⇒ SRU, SRW, OpenSearch, OpenURL, Z39.50, OAI-PMH、メタデータは、DC-NDL(RDF)形式
- ◆ 機械翻訳機能 日中韓英の言語での検索・表示
- ◆ 検索結果のグルーピング

National Diet Library (NDL)

6

国立国会図書館東日本大震災アーカイブ (ひなぎく)

<http://kn.ndl.go.jp>



- 2013年3月公開
- 東日本大震災に関する情報を一元的に検索・活用できるポータルサイト機能＋電子書庫機能
- 東日本大震災関連の情報248万件を検索可能
- 権利関係で課題多数

National Diet Library (NDL)

7

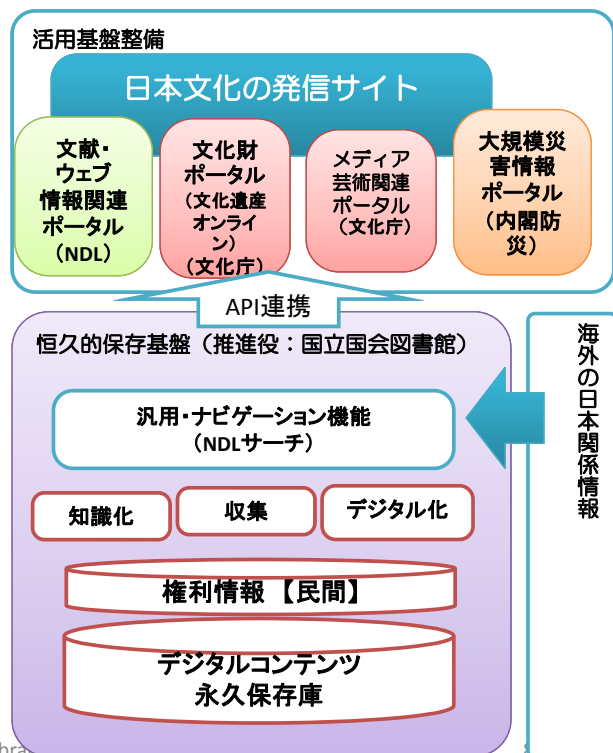
各種アーカイブ構築施策の一元化

個別の情報基盤（個別所管体制）



各施策の一本化

日本の文化情報基盤（司令塔：？）



National Diet Library

国のアーカイブ構築に必要な要素

日本の文化情報発信の強化

●(2) 活用基盤の整備

・・・日本文化・記録の発信・・・

文献・ウェブ情報
関連ポータル
(国会図書館)

文化財ポータル
(文化遺産オンライン)
(文化庁)

メディア芸術
関連ポータル
(文化庁)

大規模災害
情報ポータル
(?)

利用目的毎
に発信

●(1) 文化情報 デジタル化 の推進

新たな知識の創造
二次利用の活性化
社会の成長

人材育成・
確保

研究開発・
技術開発

③API連携

●(3) 恒久的保存基盤の強化

④汎用検索・ナビゲーション機能(国立国会図書館サーチ)

⑤組織化・知識化

⑥収集機能

⑦蔵書のデジタル化

⑧権利情報管理機能【民間と連携】

⑨長期保存研究

⑪デジタルコンテンツ
永久保存庫

利用目的を問わず
一元的に保存

海外の日本
関係情報

国内
アーカイブ機関

国のアーカイブでの知識インフラ構築

目的別ポータル 日本文化の発信サイト

文献
ポータル

NDL
デジタル
コレクション

文化遺産
オンライン
e-国宝...

メディア
芸術関連
ポータル

大規模災害情報関連ポータル

東日本大震災
アーカイブ
(ひなぎく)

地震関係データ
ポータルサイト

図書・雑誌
電子書籍

文化財

文化財
ポップカルチャー

大震災関連

災害情報関連

知識情報基盤(ナショナルアーカイブ)

あらゆる記録を関係
付けて知識化

汎用検索・ナビゲーション機能(NDLサーチ)

(メタデータ・コンテンツ)

API(検索・閲覧)

海外にある
日本の文化

各アーカイブ機関

NDL

知識情報

Web
情報

出版物

無形物
知識
記憶

デジタル
化

ポーン
デジタル資料

WARP

デジタル化
資料・記録

レファレンス情報

ファクトデータ
(観測データ
・一次処理データ)

組織化
インデキシング化

LINK情報

情報を内容で
関係付けた情報

ポーン
デジタル資料

デジタル化
資料・記録

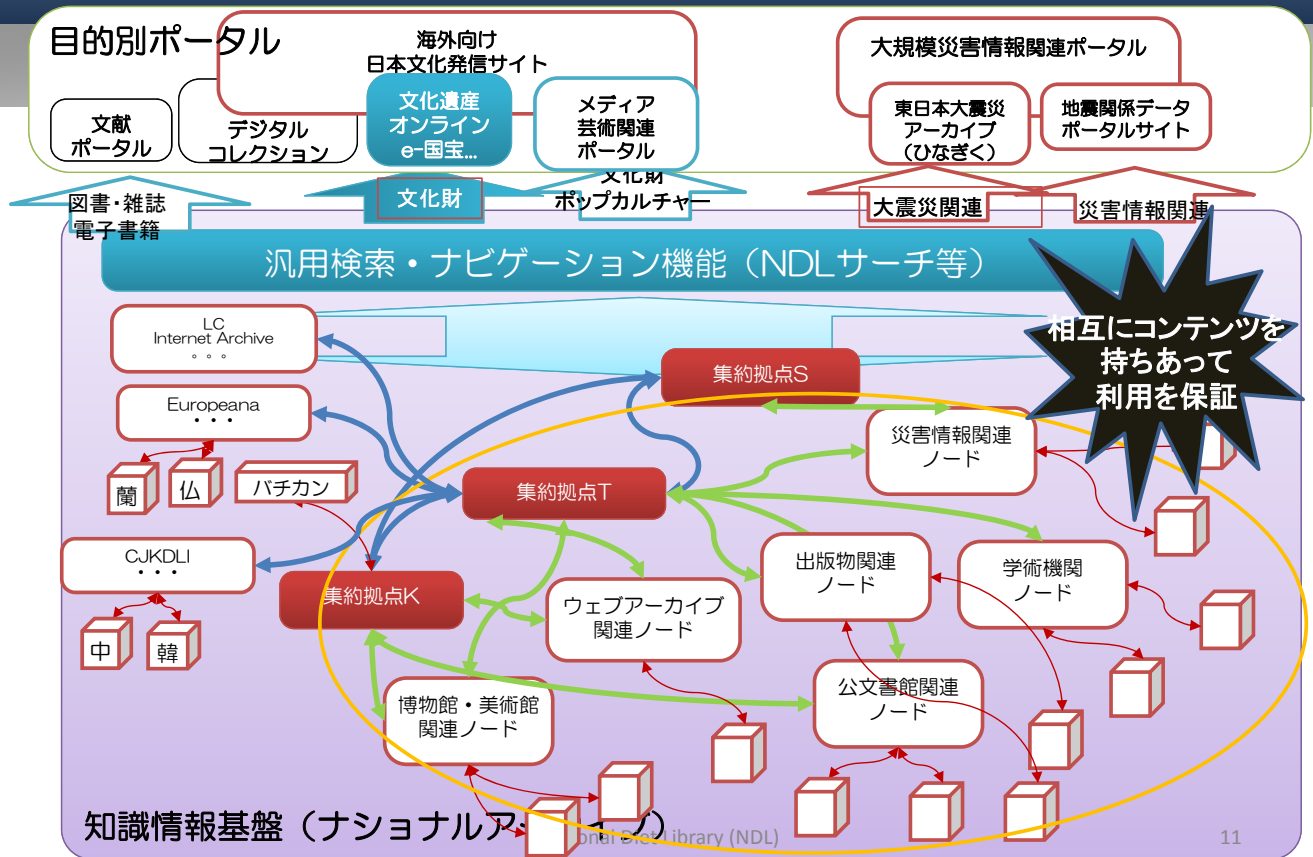
レファレンス情報

ファクトデータ
(観測データ
・一次処理データ)

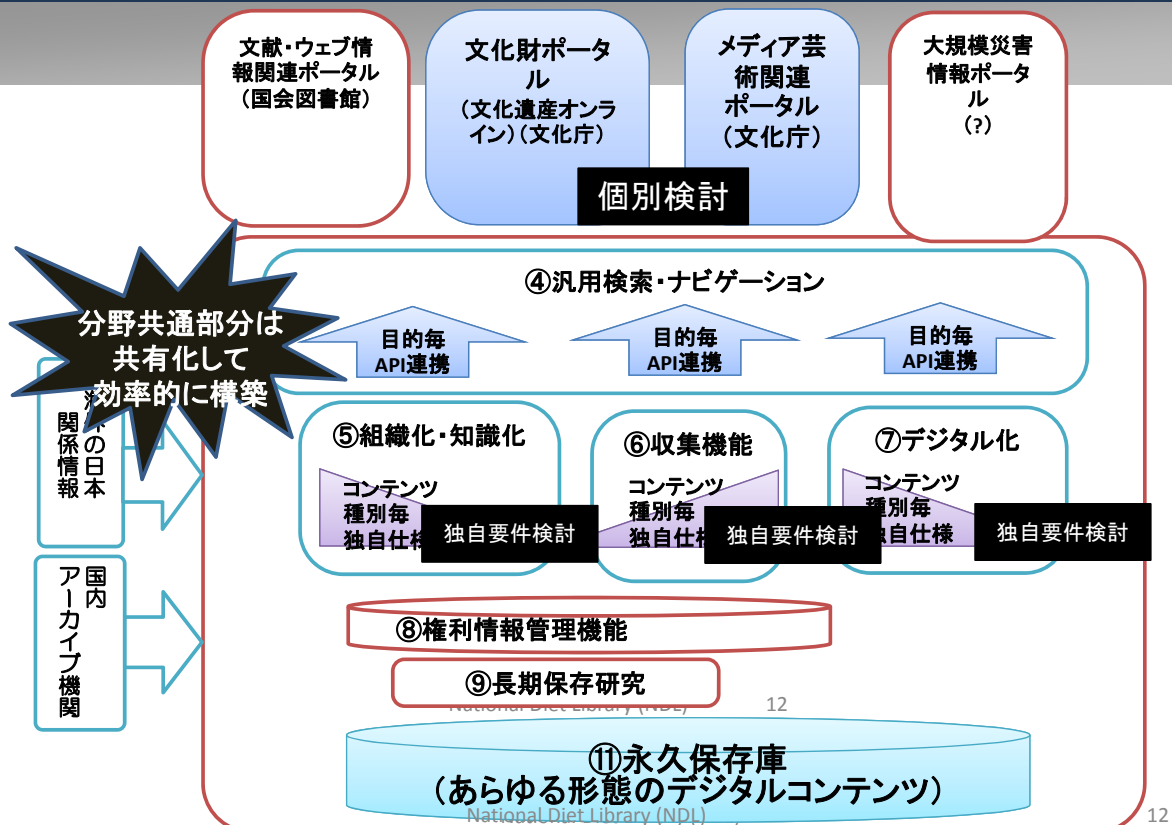
各機関
HP

・Europeana(ヨーロッパ・リソース)
・CJKDLI・Internet Archive・バチ
カン...

分散アーカイブの構成



全体共通項目と個別分野での独自要件



まとめ

「社会・経済的な価値を創出」を目指して、様々な分野のあらゆる記録を情報として集約、相互に関連付けて知識化し、将来にわたって利用を保証。
「新たな知識の創造と還流」の仕組みを構築する

- 利用者、権利保持者の双方の利益になるように
- 世界規模でのアーカイブ構築の一翼を担う

• 国としてのアーカイブ構築

- 縦割り行政の分野単位でなく、国全体のアーカイブとして大きな器の中で、各種アーカイブは分野の1つとして、全体で整合性を持って、効率的、効果的に進めるべき
- 各分野の分散アーカイブを相互補完しあう形でネットワークを形成。分野を越えて、情報同志を関連付けて知識インフラとして利用できるように。

• サービスの高度化

- デジタル化・収集・組織化・知識化・保存・提供の各フェーズの高度化に資する研究開発の促進と成果の活用
- システムエンジニア、デジタルアーキビスト、プリザベーションキュレーター、アーカイブとユーザを繋ぐコーディネータ等の人材の確保・育成

• 利用目的毎のポータル提供

- 分野毎に多様な利用者ニーズにあったポータルを利用できるように

• 法的課題の解決

- デジタル化・収集・提供に関連する制度的制約

＜京都国際マンガミュージアム/京都精華大学国際マンガ研究センターの経緯概要＞

2006年（平成18年）

- * 京都精華大学国際マンガ研究センターが、「私立大学学術研究高度化推進事業 オープン・リサーチ・センター」に採択され、京都市と共同で「京都国際マンガミュージアム」を11月に開館。マンガ所蔵資料約20万点でスタート。



2007年（平成19年）

- * 中国・深圳「第3回文化産業博覧交易会」およびフランス・パリ「第8回ジャパン・エキスポ」にブース出展。
- * 中国上海電視大学との教員・学生交流ワークショップ「日中マンガ文化交流フォーラム」を開催。
- * 文化庁ほかより「関西元気文化圏2007年ニューパワー賞」を受賞。

2008年（平成20年）

- * 京都市との共催で「第9回国際マンガサミット京都大会」を開催（会期中の来館者約14,000人）。
- * 「京都市内博物館施設連絡協議会」へ加盟し、市内文化施設との連携を強化。マンガ所蔵数、約30万点を超える。

2009年（平成21年）

- * 韓国・プチョン漫画映像振興院での「国際フォーラム」に参加。
- * 京都国際マンガミュージアムにて「第1回国際学術会議」を開催。
- * 京都府ほかより「京都創造者大賞2009アート・文化部門」を受賞。



2010年（平成22年）

- * シンガポール「ジャパン・クリエイティブ・センター」にて「MANGA & ANIME! JAPAN」展を企画・開催。
- * ドイツ・ケルンにて「第2回国際学術会議」を開催。
- * 来館者数累計が100万人を突破。

2011年（平成23年）

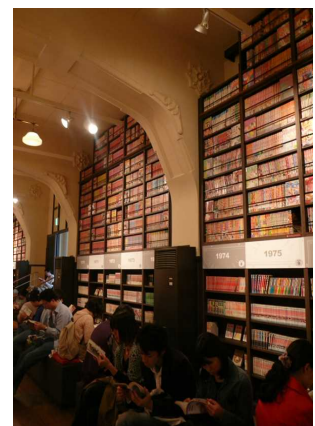
- * 京都精華大学国際マンガ研究センターが、「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択される。
- * 韓国・プチョンにて「第3回国際学術会議」を開催。来館者数累計が140万人を記録。

2012年（平成24年）

- * 京都国際マンガミュージアムおよび神戸大学にて「第4回国際学術会議」を開催。
- * フランス・パリのポンピドゥ・センターで開催された「マンガ・プラネット！」にて、展示・講演・ワークショップの各イベントを企画・開催。来館者数累計が160万人を超える。

2013年（平成25年）

- * インドネシア・バンドン工科大学にて「第5回国際学術会議」を開催。
- * 京都国際マンガミュージアムと北九州市漫画ミュージアム、明治大学米沢嘉博記念図書館との共催で、海外マンガ邦訳版のランキング「ガイマン賞」を実施。
- * 幕末から明治にかけての戯画・風刺画など、約200点の史料から成る「江戸戯画コレクション」の体系的収集と調査・研究に着手。
- * 来館者数累計が190万人を突破。
- * 文化庁が推進するメディア芸術領域のデジタルアーカイブおよびコンソーシアム構築事業に参画（2010年～現在）。



既設の京都国際マンガミュージアムと新設の東京国際マンガミュージアムの東西連携をハブにした

マンガ・アニメ・ゲームのネットワーク型ナショナル・アーカイブ構想

